

英語進行形における限界性の機能について

著者	原田 依子
雑誌名	長崎外大論叢
号	24
ページ	7-15
発行年	2020-12-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1165/00000768/

*The Journal of
Nagasaki University of Foreign Studies
No. 24 2020*

英語進行形における限界性の機能について

原田 依子

On a function of telicity in the meaning
of English progressive form

HARADA Yoriko

長崎外大論叢

第24号
(別冊)

長崎外国語大学
2020年12月

英語進行形における限界性の機能について

原田 依子

On a function of telicity in the meaning
of English progressive form

HARADA Yoriko

Abstract / Short Outline

The progressive form in English basically indicates a situation or an action is in progress. However, it does not always indicate the same meaning in every context. It has been pointed out that, in some cases, the meaning differs according to its aspectuality of a verb or a verb phrase. It has also been pointed out that the related nouns (such as subject or direct object) change its aspectual character of verb phrases. This paper examines the influence of telicity to the aspectuality of verbs or verb phrases and clarifies the following: when a verbal aspect is perfective and includes its end-point or goal due to the telicity, a progressive form indicates an ongoing situation toward the goal. In this case, end-point or goal is focused as a situational salience. On the other hand, when a verbal aspect is imperfective and has no end-point due to its atelicity, the progressive form indicates the situation that is continuously in progress for a certain period.

キーワード

進行形, telicity, 機能

1. はじめに

英語の進行形における最も基本的な意味に、“He is running in the park.”（彼は公園を走っている最中だ）のように、現在進行中の動作を表わすものがあるが、このほかにも、“The bus is stopping.”（バスが止まろうとしている）や“We are arriving at the station.”（もうすぐ駅につく）などの、動作の完了（完結）や未来などを表わす場合がある。このように、英語の他の文法概念に比べ、進行形が表す意味は多岐にわたっており、その意味や意味体系を明らかにする研究には膨大な蓄積がある。複数ある進行形の意味において、最終的に文レベルでどの意味に特定されるかについては、動詞のアスペクトが影響していることが指摘されているが（Leech and Svartvik 1994, Dowty 1979, Lyons 1977）、同時に、その動詞のアスペクトは目的語の名詞に応じて変化することもある（Verkyul 1972, Lyons 1977, Smith 1997）。つまり、アスペクトには複数の捉え方があり、テンスを伴い文レベルで表わされるアスペクトと、動詞の語彙的意味のレベルにおけるアスペクト、さらには動詞につく目的語との関連により示されるアスペクトなどが、最終的に文で表される進行形の意味（アスペクト）は、その動詞、もしくは目的語を含む動詞が表わすアスペクトにより決まることになる。

本稿では、進行形が表わす様々な意味において、動詞、および目的語を含む動詞のアスペクトがど

のように機能しているのかについて、特に限界性 (telicity) に焦点を当てて、その意味機能を考察する。まず、アスペクトの定義を確認した後、英語の進行形が表わすアスペクト、さらに英語の進行形のアスペクトに影響を与える動詞が持つアスペクトに基づく動詞分類を概観し、どのような性質を持つ動詞が使われた際に、進行形はどのような意味を持つか、また、それぞれの意味的相関関係を考察した後、進行形の意味における限界性の意味機能を検討する。なお、議論が煩雑になることを避けるため、否定形や副詞は考慮に入れず、“be+ing” の形に対象を絞ることにする。

2. アスペクトの機能的位置づけ

言語表現における時間関係は、テンスとアスペクトによって表わされ、-ed や-ing のような屈折を用いて表示される。テンスが、事態がどの時点において生じたものであるかを表わす文法概念で、現在と過去の二つの時間に事態を位置づける機能があるのに対して、アスペクトは、そのような位置づけの機能はなく、事態がどのプロセスにあるかを表わす。Comrie (1976) は、アスペクトを “Aspects are different ways of viewing the internal temporal constituency of a situation.” と定義づけており、アスペクトを「状況が持つ内的な時間構成」として捉えている。これによると、文レベルで表わされる事態の展開の経過を、話者がどのように捉えているかを表わすのがアスペクトであり、動詞のアスペクトのみならず、副詞やモダリティなども含む、文レベルでの広いアスペクトの捉え方であると言える。それに対して、Quirk et al. (1985) では、アスペクトを “Aspect refers to a grammatical category which reflects the way in which the verb action is regarded or experienced with respect to time.” と定義している。Quirk et al. (1985) では、アスペクトを統語形式で表わされるレベルで捉えており、Comrie (1976) よりも、よりアスペクトを狭くとらえていると言える。また、Chung and Timberlake (1985) はアスペクトを “Characterizes the internal temporal structure of the event.” と定義しており、あくまでも事態 (“event”) のレベルで、つまり話者の解釈や副詞などの要素を含まず、動詞が表わすアスペクトが、進行形のような文法形態素を伴うことで表わす事態が、どのような時間的プロセスを表わすか、つまり、テンスにより示された現在・過去のスコープ内で、表わされる事態のプロセス（進行中を表すのか、事態の完了を表すのか等）をアスペクトとして捉えている。このように、アスペクトの定義は研究者によりそのレベルがさまざまであるが、本稿では、動詞（句）のアスペクトがもつ意味素性の中の限界性が、文レベルでの事態アスペクトにどのような機能を果たしているかを考察するため、Chung and Timberlake (1985) のアスペクトの定義に従い議論を進める。

2.1 アスペクトの種類

文レベルの事態が表わすアスペクトは、まず perfective (完結相) / imperfective (非完結相) に分けられる。Leech and Svartvik (1994) では、perfective が「始まりと終わりがある、一回の出来事」として事態を表わすのに対して、imperfective は「一定期間動作・状態が継続された状態で、事態の始まりと終わりが意識されない」事態として表わすとしている。また、Langacker (1991) では、perfective が、「時間の流れにおいて、変化が認識される事態」であり、imperfective が「時が流れても変化が意識されない事態」としている。このように、perfective が、事態を「変化のある事態全体を一つの完結した」ものとして捉えるのに対して、imperfective は事態を「(事態)の一部を変化が意識されない事態」として捉える表現であるといえる。完了形 (have + V(pp)) などは、動作が完

了したことを表わすことから、perfective であるが、本稿で扱う進行形が表わす事態は、動作が進行中（それにより、まだ完結していない状態）であることから、imperfective であることになる。

2.2 Vendler の動詞分類

また、このアスペクトの分類は、動詞にもあてはめることができる。動詞に内在する時間的性質は、進行形などの文法範疇が表わすアスペクトが表わす意味から区別されてきたが、Charleston (1955) では、この二つのアスペクトは、関連性が高く、実際に動詞がもつアスペクトは、文中で解釈されるアスペクトに影響を与えることが指摘されている。

動詞が持つアスペクトの分類は、Vendler (1967) にさかのぼる。Vendler (1967) の分類では、動詞は、まず進行形で使われるかどうかを基準に、活動動詞 (activity) と状態動詞 (state) に分けられ、活動動詞は行為の完了点を内包するか否かで、さらに活動動詞と達成動詞 (accomplishment) に分けられる。また時間的幅を持ち行為が完了するまでのプロセスを表わす達成動詞のうち、瞬間的に終わるものを到達動詞 (achievement) として区別している。

1. 状態 (state) : He was sick for three days.
2. 活動 (activity) : He walked for an hour.
3. 達成 (accomplishment) : He painted a picture in an hour.
4. 到達 (achievement) : He arrived at the hotel at 7:00 p.m.

状態動詞は、動きが意識されない事態であるのに対して、活動動詞、達成動詞、到達動詞は、動きがある事態を表わす。また、活動動詞は動きがあるものの、同質の同じ動きが継続していくことを表わすため、行為が完了点に至るまでの変化を含意する達成動詞や到達動詞とは異なる。例えば、“We walked for an hour.” であれば、歩くという一つの行為が一時間継続したことを表わすのに対して、達成動詞の “He painted a picture in an hour.” は一時間で絵を描き終えたことを表わし、「絵を描く」という完了点に向かって、変化した事態を表わす。さらに、その完了点に至る瞬間のみを表わしたのが到達動詞であることから、“He arrived at the hotel at 7:00 p.m.” は、7時に到着したという時間的幅のない結果・事態を表わす。

Perfective/imperfective の区別を当てはめると、状態動詞、活動動詞が内部の一経過を均質的に、時間の経過による変化を認識しない imperfective に当てはまるのに対して、達成動詞、到達動詞は、事態の終わりを含む変化が意識されたものとして事態を捉えることから perfective に当てはまることになる。

3. 進行形が表わす事態がもつ意味要素

英語の進行相が表す事態は、継続している状態、限定的な状態、未完了の状態を表わす (Leech 2004, Quirk et al. 1985) ことから、事態の経過を表わし、その始まりや終わりは意味に含まれないことから、imperfective な事態として表わすということが出来る。例えば、“Mary is walking in the park.” であれば、発話時において Mary が散歩の最中であるという、進行中の動作を表わす。また “The ice on the lake was already melting, so we did not dare to stake on it.” (Declerck 1999) であれば、過去

の時点ですでに溶けかけていたので、という完全に溶けてしまう完了点に至る前の途中経過を表わしていることから、氷の解け始めと溶け終わりは表わされていないため、imperfective であるといえる。

3.1 動詞のアスペクトと進行形の意味の相関

このように、進行形は複数の意味を持つが、文レベルでどの意味としてあらわされるかは、動詞のアスペクトが関わっていることが指摘されてきた。Leech (2004) は、それぞれの動詞に応じた進行形の意味には傾向があるとしており、まとめると次のようになる。

1. Activity verbs: (drink, eat, play, rain, read, run, talk, watch, work, write)

例) “They are playing tennis in the park.” (彼らは公園でテニスをしている。)

2. Transitional Event verbs: (arrive, die, fall, land, leave, lose, stop)

例) “David Campbell was arriving when the bomb exploded.” (Leech 2004)

(爆弾が爆発した時、David Campbell は到着する直前でした。)

Activity verbs の進行形が、ある一定期間、動作が進行中であることを表わすのに対し、Transitional Event verbs の進行形は、事態が完了点に向かって進んでいることを表わし、「到着している最中だ」の意味ではなく、「到着の直前(到着間際)」の意味になる。その一方で、Process verbs の進行形は、事態が変化しつつあることを表わし、「変化している最中」ではなく「良い天気」に向かって変化している、という意味になる。

3. Process verbs: (change, develop, grow, increase, learn, mature, slow down, widen)

例) “The weather is changing for the better.” (天気が良くなってきている。)

Activity verbs は Vendler の活動動詞、Transitional Event verbs は、変化や動作が成立する瞬間を表わしているので到達動詞、Process verbs は一定の期間の中で事態の完了点に向かって変化していることを表わすので達成動詞に当てはまると考えることができる。またその結果、Vendler の動詞のカテゴリーに応じた進行形の意味は、次のようにまとめ直すことができる。

活動動詞：進行中である動作

到達動詞：完了点に向かって進んでいる、もしくはその直前にある状態の動作

達成動詞：異なる状態に変化しつつある状態

もともと imperfective なアスペクトをもつ活動動詞は進行形になると、その動作が進行中(の状態)である、同じく imperfective な事態として表わされる一方で、perfective なアスペクトをもつ到達動詞、達成動詞は、進行形になることにより、ある状態に向かって変化している状態にあるという、imperfective な事態に変化する。Vendler (1967) では、状態動詞と到達動詞は進行形にならないとしているが、到達動詞も状態動詞も用例としては存在するため、本稿では考察の範囲に含めることに

する。

3.2 動詞カテゴリーの移行

このような達成・活動・到達・状態という4つのカテゴリーに属する動詞は、それぞれのカテゴリーに固定されているというわけではなく、様々な要因によって他のカテゴリーに移行する。特に、直接目的語の名詞句の性質により、カテゴリーが変化することがあることが指摘されており (Binnick 1991, Dowty 1986, Lyons 1977)、例えば、活動動詞に完了点を表わす名詞を加えることで達成動詞に変化する。

(1) a. He ran for an hour.

b. He ran 10 miles in an hour.

(Dowty 1986)

10 miles という走る距離が特定されることにより、それが事態の完了点になるため、run 自体は imperfective な活動動詞であるが、完了点を含む perfective の達成動詞に変化する。また、達成動詞から完了点を取り除くことで、活動動詞になる。

(2) a. He read the book in an hour.

b. He read books for three days.

また(2)では“books”と複数形にすることで、「ある特定の本を読む」のような特定の完了点が「本(この場合は総称)を読む」という不特定な、個別化されない一般的な動作を表わすため、活動動詞に変化することになる。

3.3 限界性

このように、直接目的語の性質によっても動詞のアスペクトが変化するということは、動詞が本来持つアスペクトだけではなく、目的語を含めた動詞が、実際に文中で使われている事態アスペクトを見た上で、進行形の意味との相関を考える必要がある。

目的語によりアスペクトが変化するということは、動詞が本来持つアスペクトにある意味要素が加わることにより、事態が表わすアスペクトが、本来動詞が持つアスペクトとは異なるアスペクトに変化するということになる。例えば、“John read a book.”と“John read books.”(いずれも Depraetere 1995)において、前者は到達動詞であるのに対して、後者は活動動詞であり、いずれも同じ動詞(read)で同じ形(過去形)であれば、同じアスペクトになるはずであるが、目的語(一冊の本か本全般か)が変わることにより、動詞のカテゴリーが変化する。

Depraetere (1995) は、アスペクトがもつ意味素性の中で、限界性がカテゴリー移行に影響を与えていることを指摘している。限界性とは、事態が完了点(endpoint)を持つかどうかに基づく意味上の分類点(“a classification based on potential endpoints” (Depraetere 1995))のことで、動詞(もしくは動詞句)が本来表わす事態に、完了点が内在するか否かによりアスペクトの種類を分けることができる。本来、状態動詞や活動動詞は、非限界的であるのに対して、達成動詞や到達動詞は限界的

であるが、目的語に完了点となる意味要素が加わることにより、活動動詞として非限界的な事態を表わしていた文が、完了点となる意味要素が加わることにより、達成動詞として限界的な事態を表わす文に変化することになる。

4. 進行形における限界性の意味機能

英語の進行形は、基本的に imperfective な事態を表わすが、目的語や、自動詞の場合は主語の形によって異なる事態を表わす。

- (3) a. Petrol was leaking out of the tank. (非限界的)
 b. The petrol was leaking out of the tank. (限界的) (Depraetere 1995)

同じ過去進行形であるが主語が総称であるか、特定の対象を表わすかにより、限界性は異なる¹。活動動詞が進行形で用いられた場合、動詞で表わされた動作が進行中であることを表わすが、(4)a, (4)b は目的語の形により限界的であるが、(4)c, (4)d は非限界的になる。

- (4) a. She is eating an apple.
 b. She is eating the apple.
 c. She is eating apples.
 d. She is eating apple.

いずれの文も、リンゴ ((4)d はリンゴそのものよりも、リンゴを使った料理) を食べている状況を表わしているが、(4)a と(4)b は、「リンゴを食べている最中だ」という意味のほかに、文脈に応じて「まだそのリンゴを食べている (途中だ)」という解釈も可能である。

一方、動詞がもつ意味自体に完了点を持つ到達動詞は、進行形で使われた場合、動詞により表わされた動作が進行中であることを表わさず、事態が完了点に近づきつつあることを表わす。

- (5) a. The bus is stopping. (バスが止まりかけている⇔*バスが止まっているところだ)
 b. My watch is dying. (時計が止まりそうだ⇔*時計が止まっているところだ)

同様に、“The train is now arriving at the station.” においても、まだ駅に到着していないが、間もなく着くことを表わしている。動詞がもつ意味自体に完了点を持つ達成動詞も、進行形で使われた場合、動詞により表わされた動作・事態が進行中であることを表わさず、事態が完了点に向かい変化しつつあることを表わす。

- (6) The weather is changing for the better. (Leech 2004)
 (天気が良くなってきている⇔*天気が良くなったところだ)

また、例えば “He is discovering the truth.” において、“discover” 自体は限界的であり、それが

進行形になることで、発見するという完了点に近づきつつあるという意味になる。一方で、状態動詞であっても、“At the moment, they’re living in an very small flat.” (Eastwood 2009) や “He was knowing the truth.” のように、変化の過程を表わす場合がある。状態動詞は、一般的に進行形にならないと言われているが、実際にはこのように状態の変化や、一時的な状態を表わすことがある。ただし、達成動詞と違い、このような状態動詞の進行形による状態変化は、主語となる人物の意図性が含意されているように感じられ、一般的な知識としての事態から予測可能な完了点に向かって、状況が変化している、という意味の達成動詞の変化とは異なり、進行形が基本的に持つ「動作が進行中である」という意味に含まれる、まだ動作が完結していない、途中の(一時的な)状況 (Leech and Svartvik 1994) という意味が前景化された結果であると思われる。

5. 考察

では、なぜ到達動詞と達成動詞は、動詞が表わすような進行中(継続中)の動作を表わさないのだろうか。

活動動詞と到達動詞・達成動詞の違いの一つに、活動動詞が非限界的であるのに対して、到達動詞・達成動詞は完了点を持つ限界的である点がある。到達動詞・達成動詞いずれの進行形も、完了点の状態になりつつある、もしくは完了点の状態に向かって変化しつつある状態を表わしており、完了点が事態の中で顕在化し、そこへ向かい進んでいる状態を表わしている。

- (7=5) a. The bus is stopping. (バスが止まりかけている→止まっている状態になりつつある)
 b. My watch is dying. (時計が止まりそう→止まっている状態になりつつある)

- (8=6) The weather is changing for the better. (天気が良くなった状態に近づきつつある)

このように、到達動詞や達成動詞が進行形になった際、完了点に向かって進んでいる状態を表わし、特に瞬間的な到達動詞については、完了点に到達する直前であることを表わす。同時に、同じ瞬間的な動作を表わす動詞であっても、完了点を持たない動詞は進行形において、そのような事態としては表わされず、繰り返される動作を表わす。次の文において、進行形の(9)aは何度も連続する動作(「彼は頷き続けた」)を表わすのに対して、(9)bは一回だけうなずいたことを表わす。

- (9) a. He was nodding.
 b. He nodded. (Leech 2004)

また、一般的に、状態動詞は進行形にならないとされているが、状態動詞が進行形で使われることにより、限定的な期間にのみ成立している事態を表わす。

- (10) a. He lives in London.
 b. He is living in London.

(10)a はロンドンに継続的に住んでいることを表わすが、(10)b は何らかの事情があり、「一時的に」住んでいることを表わす。状態動詞が本来非限界的であることから、活動動詞と同様、動詞が表わす事態が継続的に成立していることを表わしているが、単純現在形の(10)a とは異なり、一時的な期間に限定されていることが進行形により表わされる。これは、進行形の基本的な意味である「ある動作が行われている最中である」という意味に含まれていると考えてよいと思われる。現在進行形であれば発話時現在、過去進行形であれば、過去のある一時点において、ある動作が行われている最中である、という事態は、その時点の状態に限定して述べているのであり、単純現在形のような永続性や一般性は含まれていない。あくまでも「今時点」は成立しているということであり、ここに進行形のもつ「ある特定の時間内において」という意味が、状態動詞の進行形においても表わされているのであると考えられる (cf. Leech and Svartvik 1994)。

6. 結論

本稿では、進行形の意味において限界性の要素がどのような機能を果たしているか考察を行った。英語における進行形は、動作が進行中であることを表わす文法概念であるが、あらゆる条件において同じ意味を表すわけではなく、動詞（句）がもつアスペクトに応じて、言語化される際に焦点化される点異なる。英語における進行形は、動作が進行中であることを表わす文法概念であるが、あらゆる条件において同じ意味を表すわけではなく、動詞（句）がもつアスペクトに応じて、言語化される際に焦点化される点異なることが観察された。そこには限界性が関わっており、従来、限界性により動詞のアスペクトが変化することは指摘されてきたが、それは進行形の解釈にも影響を与えており、限界性により完了点などの顕在性を持つ要素をもつ事態の場合、その部分が中心となり、そこに向かって事態が進行している状態が継続していることを表わすのに対して、非限界的 (atelic) で完了点を持たない動詞は、進行形においては、一定期間、動詞が示す状態や動作が継続して進行していることを表わす傾向が見られた。

進行形の意味は多岐にわたっており、“I’m seeing small boat in the sea.” のように、知覚動詞が進行形で使われた場合は主観的な知覚を表わし、“She is always forgetting something.” のような場合は、繰り返される事態にいら立ちを表わすなど多岐にわたるが、進行中の動作以外に含まれる意味要素により、表わされる進行形の意味的違いについては、本稿では扱えなかったため、稿を改めて考察を行いたい。

注

1. 進行形により、ガソリンの流出が終わっていないことを表わしているが、行為の目的 (goal) を表わすのが限界的 (telic) であり、時間的な枠 (始めと終わり) が明確であるかどうかは、bounded という概念で表わされる。従って、(3)a は非限界的 (atelic) で unbounded であるのに対して、(3)b は限界的 (telic) で unbounded となる。

【参考文献】

- Binnick, R. 1991. *Time and the Verb*. New York: Oxford University Press.
- Charleston, M. 1955. “A Reconsideration of the Problem of Time, Tense, and Aspect in Modern

- English" *English Studies*, 36, P.p. 263-278. London and New York: Routledge
- Chung, S. and Timberlake, A. 1985. *Tense, aspect, and mood. In Language typology and syntactic description, Vol. 3, Grammatical categories and the lexicon.* Edited by T. Shopen, P.p. 202-258. Cambridge: Cambridge University Press.
- Comrie, B. 1976. *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Deckerck, J. 1999. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha
- Depraetere, I. 1995. "On the necessity of distinguishing between (un)boundness and (a)telicity" *Linguistics and Philosophy* 18. P.p. 1-15. Netherlands: Springer.
- Dowty, D. 1979, *Word Meaning and Montague Grammar*. Dordrecht: Reidel.
- _____. 1986. "The Effects of Aspectual Class on the Temporal Structure of Discourse: Semantics or Pragmatics?" *Linguistics and Philosophy* 9. P.p. 37-61 Netherlands: Springer.
- Eastwood, J. 2009. *Oxford Practice Grammar Intermediate: With Answers*. New York: Oxford University Press.
- Langacker, R. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar, Volume II, Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- Leech, G and Svartvik, J. 1994. *A Communicative Grammar of English*. 3rd edition. London: Longman.
- Leech, G. 2004. *Meaning and the English Verb*, 3rd edition. London: Longman.
- Lyons, J. 1977. *Semantics II*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Quirk, R. Greenbaum, S., Leech, G. and Svartvik, J. 1985. *A comprehensive grammar of the English language*. London: Longman.
- Smith, C. 1997. *The Parameter of Aspect*, 2nd edition. Dordrecht: Kluwer.
- Verkuyl, H. 1972. "Aspects as Compound Categories" *On the Compositional Nature of the Aspects*. Foundations of Language (Supplementary Series), vol 15. P.p. 40-97. Netherlands: Springer.
- Vendler, Z. 1967. *Linguistics in Philosophy*. Ithaca: Cornell University Press.